日本気象学会2019年度総会議事録

日　時：2019年５月16日（木）13時30分～14時45分
場　所：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）大ホール
出席理事：岩崎俊樹，瀬上哲秀，青柳曉典，氏家将志，榎本　剛，佐藤　薫，佐藤正樹，塩谷雅人，新保明彦，竹見哲也，坪木和久，仲江川敏之，中村　尚，早坂忠裕，平松信昭，廣岡俊彦，堀之内　武，余田成男，渡部雅浩，以上19名（理事数現在20名）
出席監事：鈴木　靖，高谷康太郎，以上２名
出席者：個人会員の会場出席者131名，総会参加票による出席者1,549名，合計1,680名．（個人会員現在総数3,183名（2019年４月10日現在））
決議の要件：社員総会の決議は，定款第17条第１項により総社員の議決権の３分の１以上を有する社員が出席し，出席社員の議決権の過半数をもって行う．

議　事

１．開会

氏家理事より出席状況と決議の要件を満たしていることが報告され，総会の開会が宣言された．

２．議事選出

総会議長に木本昌秀会員（東京大学大気海洋研究所）を選出した．

３．理事長挨拶

今年（2019年）の春季大会は木本昌秀大会委員長をはじめ，東京大学大気海洋研究所の皆様のご尽力によって開催されています．改めて心より御礼申し上げます．会場では気象学に関する熱心な討議が続いています．学会に参加されている会員の皆様に心より感謝申し上げます．

日本気象学会では財政再建が大きな課題となっています．財政悪化の大きな要因は会員数の減少です．個人会員は，2000年以前は大学院重点化等の影響で増え続け，4,100人に達しましたが，その後，気象事業従事者の減少などのために3,300人程度まで減少しました．学会は，学会の魅力をアピールし，会員数を増やす努力を続けております．会員数の減少に加えて，消費税の増税や大会開催費の高騰なども財政を圧迫する要因となっています．財政的安定は健全な学会活動を実施する上で，最優先事項と考えております．

ただ，安易に会費を値上げすれば，さらに退会者が増える可能性があります．理事会では，誰でも入りやすい学会を目指し，各事業のスリム化を図り，値上げを抑えるためのギリギリの議論を続けております．古い仕組みを破壊することはある意味簡単です．しかし，長い歴史の中で作られた制度にはそれぞれ合理性があり，一度破壊してしまえばそれを復旧することは容易ではありません．慎重さが求められます．もちろん，改革に躊躇することはできず，時代に合わせて変えるべきところは変えていく必要があります．スリム化を考えるとき，学会はいかにあるべきか，という根本理念に立ち返る必要があります．会員の皆様にはこの機会に学会のあり方についてお考えいただき，ご意見をお寄せいただければ幸いです．

日本気象学会は1882年５月に東京気象学会として創立されました．その経緯は1957年に取りまとめられた，「日本気象学会75年史」に詳しく記述されております．少し紹介いたします．当時の会員の多くは中央気象台の職員で，仕事である気象学を，仕事とは一線を画しつつ深めることを目的としていたようです．会員数は創成期の後，明治・大正期におよそ300人から400人でした．会員には通常会員と特別会員がありました．学会運営は特別会員の権限でしたが，総会ではすべての会員が学会運営に意見を述べることができたということです．また，時代とともに特別会員と通常会員の会費や権限の差が縮小されたと記載されています．75年史に見る限り，戦前の学会も考えた以上に民主的に運営され，主体的に活動していたように見えます．学会が仕事とは一線を画して組織されていたことに大きな意義があったと考えます．当時の学会でもっとも重要なのは，出版事業です．気象集誌は当時の学会誌であり，論文も当時は和文が中心でした．気象集誌は自発的な調査研究の発表の場として，あるいは全国の有志の情報交換の場として重要な役割を果たしていたと考えられます．現在は誰でもホームページから140年分の気象集誌を閲覧することができます．会員が数百人の時代に，毎年数百ページもの出版をしていたことは，当時の表現への意欲を感じさせ，注目に値します．気象集誌は最初のうちは非売品でしたが，の

ちに一般にも販売されるようになり，今日的な言い方をすれば，社会への情報提供にも役立っていたといえます．

さて，話を現代に戻します．事業経費のスリム化を図らなければなりません．しかし，活動は委縮する必要は全くありません．出版は今日においても大会運営と並ぶ気象学会の重要な事業です．気象学会では，天気，気象集誌，SOLA，さらには気象研究ノートを出版しています．出版事業はボランティア編集委員の努力によって支えられています．出版論文数が増えれば，財政の安定化と事業の拡大の両者を達成することができます．近年，学術雑誌は一部のグローバル化した出版社による寡占が進み，雑誌間の論文獲得競争が一段と激化しています．研究者にとっては海外の有名な雑誌に自由に投稿できる時代となり，好ましい現象といえるでしょう．しかし，ぜひ気象集誌にも積極的に皆様の貴重な論文を投稿していただくようお願いします．幸いにして，現在高いインパクトファクターを維持しており，充実した出版活動を通じて，日本の気象学の新しい展開を図りたいと考えております．ご協力よろしくお願いいたします．春・秋の大会も予稿集の電子化等，改革が進められています．これについても学会の議論全般に関して，皆様の忌憚のないご意見をお聞きしたいと思います．よろしくお願いいたします．

以上，私のご挨拶に代えさせていただきます．

4．表彰

（1）日本気象学会賞

岩崎理事長から受賞者に賞状並びに賞金・メダルが授与された．受賞者と，受賞対象となった業績は以下の通り．

原　圭一郎（福岡大学理学部地球圏科学科）

極域エアロゾルシステムの動態に関する観測的研究

増永浩彦（名古屋大学宇宙地球環境研究所）

複合的な衛星観測データの解析による熱帯対流力学の研究

（2）藤原賞

岩崎理事長から受賞者に賞状並びに賞金・メダルが授与された．受賞者と，受賞対象となった業績は以下の通り．

新野　宏（東京大学大気海洋研究所）

大気中の渦・乱流等メソスケール気象に関する先駆的研究ならびに気象学・気象業務発展への貢献

林　祥介（神戸大学理学研究科惑星学専攻・惑星科学研究センター）

地球流体力学・惑星気象学の推進ならびに関連知見集積のための情報基盤の構築

（3）岸保・立平賞

岩崎理事長から受賞者に賞状並びに賞金・メダルが授与された．受賞者と，受賞対象となった業績は以下の通り．

青梨和正（気象研究所），久保田拓志（宇宙航空研究開発機構）

衛星観測による全球降水マップの開発と社会での実利用推進に関わる功績

（4）気象集誌論文賞

気象集誌編集委員会委員長の佐藤理事が選定理由を説明した．受賞者と，受賞対象となった論文タイトルは以下の通り．

Jing XU and Yuqing WANG

“Effect of the Initial Vortex Structure on Intensification of a Numerically Simulated Tropical Cyclone”

Eigo TOCHIMOTO and Hiroshi NIINO

“Structure and Environment of Tornado-Spawning Extratropical Cyclones around Japan”

Hironori IWAI, Shoken ISHII, Seiji KAWAMURA, Eiichi SATO and Kenichi KUSUNOKI

“Case Study on Convection Initiation Associated with an Isolated Convective Storm Developed over Flat Terrain during TOMACS”

（5）SOLA 論文賞

SOLA 編集委員会委員長の竹見理事が選定理由を説明した．受賞者と，受賞対象となった論文タイトルは以下の通り．

Kosuke ITO, Hiroyuki YAMADA, Munehiko YAMAGUCHI, Tetsuo NAKAZAWA, Norio NAGAHAMA, Kensaku SHIMIZU, Tadayasu OHIGASHI, Taro SHINODA, and Kazuhisa TSUBOKI

“Analysis and Forecast Using Dropsonde Data from the Inner-Core Region of Tropical

Cyclone Lan (2017) Obtained during the First Aircraft Missions of T-PARCII”

5．2019年度総会議案審議

（1）議案説明

議案1：2018年度事業報告

氏家理事から，研究会及び講演会等の開催と普及・啓発活動，機関誌等の刊行，研究業績の表彰等の事業が報告された．また，会員の異動状況や2018年度は第40期役員の選任，電磁的方法による議決を可能にする定款の改正を行ったことが報告された．

議案2：2018年度決算報告

新保理事から，公益法人会計基準に従った決算報告があった．受取会費の43%を公益会計に，57%を法人会計に配分したこと，小倉義光・正子基金は研究会事業と研究奨励事業に振り分けたことが報告された．また，昨年度からの赤字幅の拡大について，刊行事業におけるカラー印刷費の増加，表彰事業における表彰用メダルの購入といった点を備考として挙げられた．

議案3：2018年度監査報告

高谷監事から，帳簿類の管理，収支，事業執行状況と学会の運営状況等に関する監査結果が報告された．2018年度の活動について，大会・研究会の開催と学術誌の出版などの研究活動，一般向け教育・啓発活動が例年通り活発に行われている他，小倉義光・正子基金による「小倉特別講義」等，活動のさらなる充実について高い評価を受けた．一方，厳しい財政状況と会員数の減少傾向は変わっておらず，会費収入に見合った持続可能な活動に向けた事業の見直しを，学会の在り方を考えつつ検討する必要性が指摘された．

議案説明後，瀬上副理事長より，財政状況に関する以下の補足説明があった．

2018年度も大幅な赤字を計上し，皆様方に大変ご心配をおかけし申し訳ない．昨今のこうした赤字基調については昨年の総会でも説明し，2019年度より一般会員及び高年会員に対する約2000円の値上げを認めていただいた．2021年度からの1000円の再値上げについては，来年（2020年）の総会で提案することはすでにご案内の通りである．この2回の値上げと事業の改善・見直しにより，一時的ではあるが大幅な赤字は解消すると考えている．

ここ1年ほど，気象学会として大きな改革を急ピッチで進めている．

- ✧ 気象集誌の個人会員への冊子体配布を廃止し，団体会員（主に図書館向け）へは冊子体の提供を継続．
- ✧ 冊子体予稿集を廃止し，大会参加者全員へのPDF予稿集を配布．
- ✧ 管理費（事務経費）の削減
  - ・理事会を毎月から隔月開催にするなど，会議の見直しによる経費減（約130万円）に加え，今年度（2019年度）からはWeb理事会の開催を基本としてさらなる削減（約60万円）を図る．
  - ・昨秋の臨時総会での定款改定の承認を受け，電磁的方法による総会資料の配布及び参加票の提出を可能とした．参加票のWebによる提出は今年度（2019年度）から実施し，約2/3の会員がこの方法で提出いただいた．総会資料の郵送配布は，来年（2020年）以降は希望者のみとする．
- ✧ 会員サービスの向上
  - ・松野賞，小倉特別講義の新設
  - ・学会HPで会員専用ページを開設し，過去の気象研究ノート，PDF予稿集，昨年の小倉レクチャーのFovell教授のビデオなどを近々に公開し（注：6月初旬に実施済），今後さらに拡充する．

こうした新規事業の立ち上げでは，往々にして想定外の問題が発生する．気象集誌のカラーページ増加により，団体会員向け冊子体の印刷経費が大幅に増大し，2018年度の赤字増の一つの要因となった．印刷部数を必要最小限に減らすなど経費削減を図る．

理事会としては，できれば2021年度からの再値上げを回避したいとの思いが強い．一方で，現状の事業をそのまま継続して，それを成し遂げるのは難しい．理事長の冒頭挨拶にあったように，事業の見直し，スリム化による経費削減にも取り組む必要があると考えている．学会活動に大きな支障をもたらすような事業の見直しは避けるべきであるが，会費の値上げをするのか，値上げを避けるために多少の事

業の見直しやサービスの低下を容認するか，理事会の中でもいろんな議論がある．最終的には，2019年度の決算及び2020年度の収支見込み，また2020年度中の気象庁庁舎移転に伴う事務所経費になども踏まえて判断したい．

（2）質疑応答

議案に対する質疑はなかった．

（3）採決

議案1，2，3について，定款第17条第1項により賛成多数で承認された．

有効総会参加票1,549票のうち，理事会案賛成402票，議事別意思表示26票，議長委任1,120票及び個人会員委任1票で，議長委任票及び個人会員委任票は全て理事会案に賛成であった．また，会場に出席した個人会員131名は全て理事会案に賛成であった．

議案1：賛成1,675，反対2，保留3

議案2：賛成1,673，反対3，保留4

議案3：賛成1,676，反対1，保留3

6．2019年度総会報告事項

（1）内容説明

報告1：2019年度事業計画

氏家理事から，研究会及び講演会等の開催と普及・啓発活動，機関誌等の刊行，研究業績の表彰を一層推進する計画であることが報告された．また，大会講演予稿集を2019年度から大会の活性化を目的に大会参加者への電子媒体での事前配布を開始したことが報告された．さらに，会員向けサービスの充実，会員情報の管理・会費納入等の事務の効率化による経費削減等を目的に学会サーバーの整備を進め，会員向けWebページ上での年会費・大会参加費の納入，気象研究ノート・講演予稿集等の利用，掲示板利用等を行う計画が報告された．

報告2：2019年度収支予算

新保理事から，2019年度の収支予算について，2018年度予算との比較を中心に報告があった．会費値上げによる受取会費の増額，大会参加費値上げによる大会開催事業収益の増額，冊子の廃止による予稿集事業収益の減額，法人会計における経常費用の削減等を見込んでいること，これらを含めた結果として，2019年度の正味財産期末残高としては，約134万円の赤字が見込まれることが報告された．

（2）質疑応答

2019年度の決算が収支予算通りとなった場合における，会費の更なる値上げの有無について質問があった．これに対して，2019年度の決算に加え，2020年度予算を合わせて判断するとの回答が瀬上副理事長からあった．また，今後の気象学会への要望として，気象学会のWeb上での申し込みに失敗した際の代替措置の検討や，気象業務に対する気象学会からの科学的観点での提言の必要性が挙げられた．これらについて，前者は検討する旨の回答が講演企画委員会委員長である仲江川理事からあった．後者について，重要案件があれば会員からお知らせいただき，理事会や総会で科学的に正しく気象学会員の総意として発信すべきと考えた場合に，学会として提言などを行う旨の回答が岩崎理事長からあった．

7．議事録署名人の指名

議事録署名人に伊賀啓太会員（東京大学大気海洋研究所），渡部雅浩会員（東京大学大気海洋研究所）を指名したところ，異議なく承認された．

8．議長の解任

木本議長により，総会の議事運営に関する出席者の協力に感謝する旨の挨拶があり，議長は解任された．

9．閉会

氏家理事により，総会の閉会が宣言された．

以上の議事録の通り相違ありません．

2019年7月1日

総会議長　木本昌秀

出席者代表　渡部雅浩

出席者代表　伊賀啓太